

実に楽しかった。色んな人との語らいや出会いが。異文化に接することも。そして、これが一番だったかも知れない日常生活との暫のお別れ。

ドイツは落ち着いた律儀で堅実な街だった。フランスはドゴールの鼻のように権高かで、デコレーションが好きだった。イタリアは何とも人なつこく開放的で明るかった。

全ての道がパリに向かっているフランスはナポレオン以来、ヨーロッパの中心は自分だという誇りがあり中央集権的で、イタリアは都市国家の歴史を持ち、地方自治の意識が強い。

ドイツは行政と立法、連邦・州・郡・市のそれぞれの持ち場がはっきりしており、良く分業システムが確立している。成程、秩序と合理的精神の国だった。寒さのせい故、家を大切にし食生活は質素だという。自然を大切にし、自然を畏れる伝統があるから環境問題や科学技術の制御に敏感なのだとも。北欧に共通する歴史的な心情とのことだった。

労働組合は政党と相独立しているのが普通のことだった。「選挙運動は政党の仕事で労働組合は何もしない。労働者個々人が運動する」と、どの国でも言われた。「えっ」と考え込んだ。

個人個人の政治参加、責任観が確立している。

イタリアではストライキ権は個人にある、という。だから、簡単に山猫ストが起きる。「成程」と納得。だけど、よく工業生産が伸び秩序が保てるものだと、又、わからなくなる。

選挙運動も「お願いします。お願いします」が運動の全てである日本と、政策論争が中心のヨーロッパではギャップがあり過ぎた。フランス大統領選挙の印象である。

政党の連合や離合集散も普通のことだった。国と県と市とで違った連合の組み合わせがあっても当然だった。隣町と違っていてもいいのだ。イタリアなど、てんで組み合わせが複雑なのだ。

保守だ、革新だといって、レッテルに目くじらたてるのではなく、政治本来の政策やその理念や質を論議する。そんな作風も羨ましい。どの党も階級政党ではなく国民政党をめざし、政権の経験も持つからだろうか。

週36や40時間の労働時間も羨ましかった。余った時間で家族のレジャーを楽しむ。一緒に食事をする。子供たちは大人たちの言うことを大切にするという。当然の結果だ。イタリアでは25人学級。町で行き交う子供たちの笑顔はほんとうに明るかった。

ヨーロッパの社会主義運動は、自由・平等・博愛（連帯）を求めた市民革命以来の市民・労働者の血のにじむ民主主義の戦いの上に継承されていた。産業の無制限な発展は制御しなければならないことも身体で知っていた。

この歴史に誇りを持ち社会主義の大道は我々であるとの自信と自負にあふれていた。

独裁的・官僚的で自由を束縛する社会主義・共産主義は、我々と無縁であるばかりか、そのような思想は社会主義の基本理念に敵対している。そう確信し、実践もしていた。

国と国の入り乱れた歴史は、人と人の交わり方を教え、人間の自由・平等・連帯をその体質に

さえしていたのである。

何百年も昔の建物に住み、働き、中世の古城で夕食を楽しむ。大理石の文明は、紙と木の文明と違って、燃えない。造り変えれない。歴史と伝統が現在に実在し慈しまれる。

戦後40年、まるで様相を一変させたコンクリートジャングルの日本、国民総生産世界一を突走る日本に不気味な戦慄を感じた。

日本の近代化100年の歴史は、西欧化の歴史だった。戦後40年もそうだった。

西欧の何を学んだのか？ 西欧自体はどうなっているのか？ 日本はどうなるのか？

そんなことを知りたくて参加した今回の視察であったが、今、その一端を覗いてきた実感に身震いしている。